広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第66号　2019〉

選択授業におけるパラスポーツの導入実践に向けて（2）
― ブラインドサッカーに着目して ―

重　元　賢　史・橋　本　直　子

2020東京オリンピック･パラリンピックを控え，日本各地で様々な教育プログラムが行われている。パラスポーツの認知度はメディアや学校教育を通して急速な広がりと発展をみせるであろう。本授業では，ブラインドサッカーの授業実践を取り上げ，体育授業を通して障がい者理解とパラスポーツを普及させていきたい。

１．はじめに

2020東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を契機に，日本国内においてもオリンピックやパラリンピックの名がつく教育プログラムが実施されており，障がい者スポーツの普及が急速に広がり，学習指導要領改訂の中でもオリンピック・パラリンピックを通じた学びの重要性について触れられるようになった。これまでオリンピック・パラリンピックの教育については，様々なプログラムが実施されており，テレビ等での報道でも取り上げられることが多くなった。しかし佐藤（2015）[1]らによると，一般小中学校における障害のない児童生徒を対象とした，障害者スポーツ体験の実施や障害児を含む授業の実態および教師の意識調査研究等については既になされているものの，継続的で効果的な実践プログラムの介入や児童生徒への包括的な有用性に関する検証はなされていないと指摘している。

そのような中で，昨年度に引き続いて本校では高校「パラスポーツ」を取り入れた選択授業を実践した。本編では2019年度（令和元年度）中学校・高等学校教育研究大会（以下 研究大会と記す）で実施したブラインドサッカーについてまとめてみることにした。この取り組みを体育授業のカリキュラムに定着させるための一助としたい。

２．目的

高校生に障がい者理解を深めるために，パラスポーツを通して，自ら率先してバリアフリーやユニバーサルデザインが浸透した生活に関わっていこうとする態度を育成することを目的とする。またパラスポーツの意義を正しく理解させ，学校の教育活動の中でパラスポーツの体験講座に止まらない教材開発を目指す。

３．授業実践の概要

3-1　期間と対象

高校Ⅱ年生の選択授業は２学期（８月～10月）に15時間の計画で実施し，そのうちの５時間をブラインドサッカーの授業として重元が担当した。

今年度の高校Ⅱ年生は，男子110名，女子92名の合計202名で，うち，パラスポーツを選択した生徒は40名であった（男子：16　女子：24）。

パラスポーツの授業実践計画は表１のとおり。

表１　授業実践計画

1	オリエンテーション：パラスポーツとは（アンケート調査実施）
2	ボッチャ（室内用ペタンクを用いて）の実践学習
3	シッティングバレーの実践学習
4	サウンドテーブルテニスの実践学習
5	ブラインドサッカーとアンプティサッカーの体験学習
6	ブラインドサッカーとアンプティサッカーの実践学習

１時間目のオリエンテーション段階では，男女比の偏りが懸念され，また男女共習でのグループ作りや実施種目の調査など不安があったが，パラスポーツの歴史やルールを学習していく中で生徒の反応から男女共習でのグループ活動が可能ではないかと判断した。

単元のスタートとして誰もがわかりやすいペタンクから実施した。初めての体験に戸惑いを感じながらも，お互いが知らないからこそ，どうしたら思うようにボールをコントロールできるかを話し合ったり，作戦を相談し合ったりして声をかけ合う姿が見

られた。シッティングバレーやサウンドテーブルテニスでも男女混合のチームが編成されたが，誰もが失敗を恐れず，果敢に挑戦できる雰囲気があった。シッティングバレーでは普段のバレーボールとの違いに戸惑い，競技者のスキルの高さに感心しつつ，すぐには上達しないと悟ると独自のルールを作りながらみんなが楽しめる形に工夫する活動も見られた。

このように，単元計画の段階から誰もが楽しめ年齢や性別などを越えた活動が行えるように配慮し，生徒らがパラスポーツに親しみやすい教材提供と順番を工夫することが大切である。また，授業の中で取り扱うことのできる用具には限りがあるので，スポーツセンターや福祉センター等との連携も不可欠である。

3-2　事前のアンケート

昨年度同様に，１時間目はパラスポーツについての歴史や障害の区分などについて講義形式で紹介し，障がい者理解を図った。

事前アンケート調査を実施し，主な結果を以下にまとめた。

質問（1）「障がい者スポーツ（パラスポーツ）を知っていますか。」という問いについては，40名中38人がテレビで知ったと回答した。昨年度と同様に，多くの生徒がテレビを通して障がい者スポーツの情報を収集していることが示唆された。

質問（2）「障がい者スポーツ（パラスポーツ）を実際に体験したことがありますか。」という問いについては，40名中６人があると答え，33名がないと回答した。６名については，小・中学校のパラスポーツ体験会に参加していた。この回答は，佐藤（2015）らと同様に，各小･中学校においては障がい者スポーツ体験の実施がなされていることを裏付けた。

また，パラスポーツを選択した理由に「体験したことがなく，興味があったから」，「運動が苦手だから」，「他に選択肢がなかったから」等があった。誰もが今回初めての体験なので，できなくてもスタートラインが一緒だからとか，男女一緒にできるし，運動技能で大きな差がでることもないからという考えがあることがうかがえた。

3-3　事後アンケート

15時間のパラスポーツの授業を終えての事後アンケートを実施した。その中で生徒の感想を抜粋して考察する。

> パラスポーツを選んだ理由は，球技を得意とする経験者に交じって（自分は）何もできない（しない）ままで授業を終えるより，ほぼ全員が未経験状態から始まるパラスポーツの方が少しは自分にプラスになるような気がしたから。私のようにほぼ全てのスポーツが苦手な人でも『参加する権利』が与えられているという意味では，パラスポーツはとても開かれた競技だと思う。一方で，パラスポーツは『限定された競技』だという矛盾した意識も持っていた。その競技自体が，特定の障がいに限定している気がしたからだ。しかし，アンプティサッカーを経験して，さらには関連記事を読んだことで考え方が変わった。パラスポーツには，障がい者のリハビリのような意味合いのものと，誰もがルールの工夫で同じ土俵の上で平等に参加できるものがあると気づいた。これから先，パラスポーツの意義が見直され，幅広く浸透して，より魅力的な競技として開かれていってほしいと願う。

> パラスポーツを選んだのは，「楽しそうだから」。今思うと，私はこの時パラスポーツというものをよく分かっていなかった。最初にボッチャの映像を見て「これはスポーツなのか」と疑問に思ったくらいだ。あまり期待しないまま室内ペタンクを体験したが，一度プレイしただけでペタンクへの，そして，パラスポーツへの見方がガラッと変わった。アンプティサッカーに至っては，パラスポーツに抱いていた非活動的というイメージが払拭された。これらの体験を通して，パラスポーツの普及には，体験することが必要だ，ぜひ義務教育のカリキュラムに正式に取り入れるべきだと思った。

上記のように生徒の感想からパラスポーツへの考え方が実施後に変容しているのがわかる。また，スポーツだけでなく，社会のしくみについて問題提起し，様々な角度から自分たちの生活を見つめ直そうとする生徒も現れた。障がいがあるなしに関わらず，日常生活の中にある不自由さを改善していくアイディアを出し合い，社会を変えていきたいと決意を記しているものもあり，パラスポーツから学んだことは単に競技のルールや難易度・楽しさに留まって

いないことが明らかとなった。

ただし，競技によっては男女別の授業が必要になり，特に視覚情報を遮断する場合は，身体接触への配慮は必要であることもわかった。

４．ブラインドサッカーの授業実践について

昨年度からパラスポーツについての授業実践を様々な競技で実施してきたが，今回はブラインドサッカーの授業実践案についてまとめたい。

実際の授業について

本校の研究大会での授業実践を中心に活動内容について述べていく。ブラインドサッカーの授業計画は全５時間で行った。授業計画については，以下の表にまとめる。

1. ブラインドウォーク
2. トライアングルパス
3. 1対1の攻防
4. 3対3のゲーム形式
5. まとめ・振り返り（研究大会）

(1) ブラインドウォークについて

市販のアイマスクを着用し，体育館の端から端（約30m）を２人組でウォーキングや軽いジョギングで移動した。アイマスクを着けていない生徒が声や拍手などで誘導し，安全を確保しながら行った。

実際，「壁まであと３m」「壁まであと５歩くらい」と声掛けしたり，拍手で音を立てたりして方向を指示するなど具体的な指示を出し合い，お互いの存在の大切さを実感していたようだ。

(2) トライアングルパス

４人１組で，３人の生徒が三角形を作り，中心にアイマスクを着用した生徒を入れる。(写真①)

周りの生徒がボールを回し，そのボールをアイマスクを着用した生徒がボールを追いかける。その際にボールを追いかける生徒には，ボールの位置を把握させるために指差しをして追うよう指示した。ボールを指差しすることで多くの生徒が正しいボールの位置を把握してボールを追うことができていた。

①三角形を作ってパスを回している様子

(3) 1対1の攻防

１対１を実施するために簡易コート（７m× ４m）を作成し，その両端に一列に並び，生徒らが壁を作り，このコート外にボールやプレーヤーが出ないように工夫をした。生徒らが壁になることによりサイドからボールの音や声での指示などを壁役の生徒から行うことができるので，ボールを見失うことも防ぐことができる。(写真②)

②1対1の攻防の様子

１対１の攻防は，プレーヤーが前後に縦2列になり相手の肩を持ってスタートさせた。これは，プレーヤーがお互いに，相手の位置を把握することにより，攻防が始まった際に相手やボールを見失うのを防ぐよう，狙ったものだった。

(4) ３対３のゲーム

３対３のゲームでは，１対１の攻防と同様な形式で両端に生徒らで壁を作り，コートのサイズもバドミントンコート（13m× ６m）に変更して実施した。３対３のゲームの中では，お互いに声を掛け合う場面が表れ始めた。また，ゴールの裏にコーラーを配置したことでパスの方向やゴールの場所の指示などが明確になり，ゴールに向かってドリブルを行うような動きも見られた。

(5) まとめ・振り返り

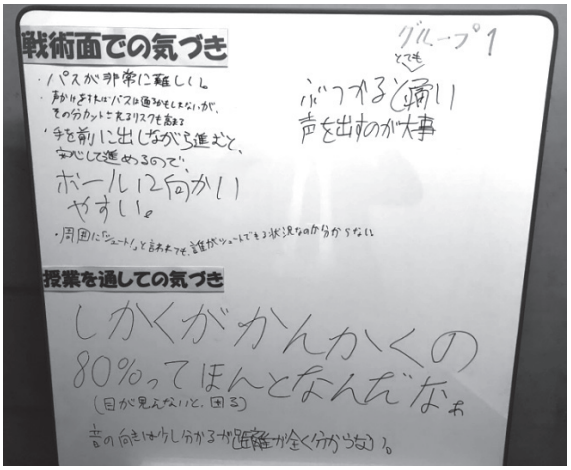
５時間目は，研究大会で実施した内容である。（指導案は，本編の後頁に資料として掲載する。）

授業内容については１～２時間目までをまとめ，３対３のリーグ戦を行った。

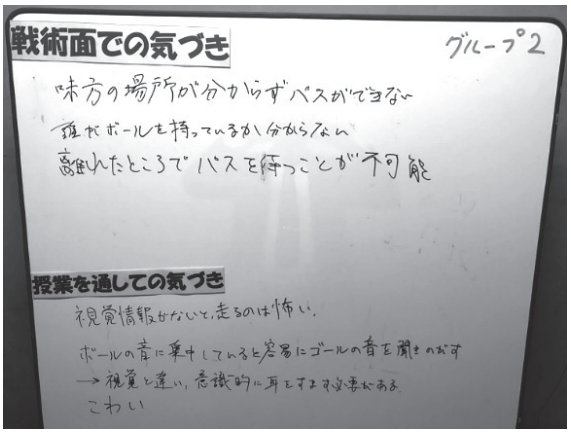
授業の最後に，５時間のブラインドサッカーを実践しての振り返りを行わせた。特に「戦術面での気づき」と「授業を通しての気づき」の２点を中心に各グループで話し合いを行わせ，振り返りをホワイトボードにまとめさせた。

その後，各グループから出された気づきやまとめを発表しあって，授業のまとめとした。

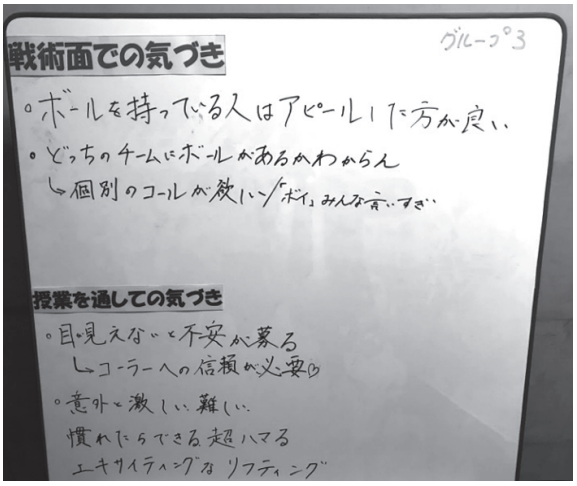
各グループ１～４に共通して挙げられた振り返りとして，味方の場所やボールの位置がわからないことや視覚情報についての気づきが多く挙げられていた。（写真③～⑥）



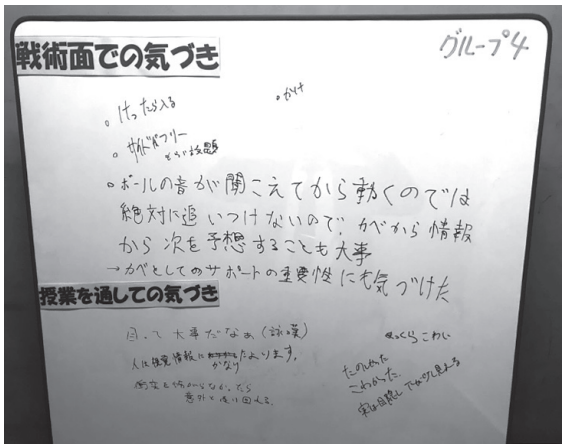
③グループ1の振り返り



④グループ2の振り返り



⑤グループ3の振り返り



⑥グループ4の振り返り

生徒の振り返りの中でも記述されているが，日本ブラインドサッカー協会では，「ブラインドサッカーは，通常，情報の８割を得ているという視覚を閉じた状態でプレーしており，技術だけではなく，『音』と『声』のコミュニケーションが重要なスポーツである」[2]としている。

生徒らはブラインドサッカーを通して，視覚情報の大切さを痛感し，実際にプレーしてみることで難しさや楽しさを感じ取ることができていた。このように，アイマスクを着けて，視覚情報を遮断することで障がい者の視点に立つことは日常的に困難な状況であり，プレーすることで障がい者の理解をすることにつながると考える。

５．まとめ

ブラインドサッカーを教材化するにあたって課題も明確になった。今回の研究大会では，授業対象生徒を男子に限定した。これは，競技によっては男女別の授業が必要になり，特に視覚情報を遮断する場合は，身体接触への配慮は必要であると考えたからである。実際，ブラインドサッカーの授業の５時間のうち，２時間目までは女子も一緒に混合する形で授業を展開していた。指差し確認，パス交換あたりまでは女子生徒も一緒に活動できていたが，１対１等のゲーム形式での対戦型の場面で，不用意な身体接触の可能性があったために男女別の活動を行った。

ブラインドサッカーのようにパラスポーツの中でも身体接触を伴う競技については，課題が多いと考える。また競技によっての男女別の授業が必要になるが，ボッチャやシッティングバレーのように男女共習かつ誰もが失敗を恐れず，果敢に挑戦できるパラスポーツから単元計画を立てることで障がい者理解の促進や生徒の意欲を向上させることができると考える。

今回のパラスポーツの実践を通して，障がい者理解だけでなく，実際に競技していく中で，誰もが楽しめるルールを考えたり，またスポーツだけでなく，社会のしくみについて問題提起するなど生徒らがパラスポーツから学んだことは多かったのではないだろうか。

生徒の感想にもあったように，パラスポーツ体験は学びの意義は大きく，学校教育において今後とも教材化が進められていくべきだろう。

６．参考・引用文献

１）佐藤敬広他（2015）「障害のない児童・生徒におけるアダプテットスポーツ教育の有用性の検証－ソーシャルスキルおよび心理的・身体的側面の変化に着目して－」『2015年度笹川スポーツ研究助成』

２）日本ブラインドサッカー協会「ブラインドサッカーとは」www. b-soccer. jp/aboutbs/aboutbs_1（閲覧日：2020年１月７日）

東京都教育委員会（2016）　「東京オリンピック・パラリンピック教育」実施方針.

オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けての最終報告」

近藤智靖他（2017）「中学校体育理論におけるオリンピック教育について-探求的調査を基にした現状把握と課題の提起」『オリンピックスポーツ文化研究』　№2　47-56.

資料

高等学校　保健体育科（体育）　学習指導案

本時の目標

1．3対3のゲームを通して，ボールの音や人の声を聞いて，自分と相手との関係を考えながら，ドリブルをしたり，シュートを狙うことができる

2．課題に対してグループで協力し，気づきや発見を共有しあい，活動することができる。

本時の評価規準（観点／方法）

①3対3のゲームを通して，ボールの音や人の声を聞いて，ドリブルをしたり，シュートを狙うことができている。（運動の技能/活動観察）

②課題に対してグループで協力し，気づきや発見を共有しあい，活動しようとしている。（運動についての思考・判断）

③健康や安全に留意しながら，ルールを守り，お互いに協力しあって活動することができる。（運動や安全についての知識・理解）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
＜導入＞ 出欠点呼 本時の説明 準備運動	 ○集合 ○本時の学習内容を把握し，課題を確認する ○アイマスクを着用しての運動 ・ランニング，サイドステップ，スキップ	 ・欠席者，見学者の確認 ・見えない状態で動くとどんな気持ちになるか，見えている人はどのように案内したらよいか考えさせる。
＜展開＞ トライアングルドリブル	○三角形で作ったグリット内でドリブルを行う。	・ボールの音やコーラーの案内を聞き，指示された方向にボールを操作できているか。
1対1のゲーム	○1対1の攻防 ・相互の位置を把握し，シュートを狙う。	・互いの位置を声かけで確認させる。
3対3のハーフコートゲーム	○3対3のミニゲームを行う ・攻守交代制で行う。 ・サイドからコーラーが，ゴールの場所の指示をする。	
＜まとめ＞ 学習のまとめ	○本時の学習を振り返り ・ゲームを行う中で気づいたこと ・ブラインドサッカーを通して感じたこと	・気づきを共有することができているか。
準備物：ブラインド用サッカーボール・簡易ゴール・ホワイトボード・アイマスク・マーカー		